

## 長楽寺禅堂

正会員 桑 原 裕 彰 君

正会員 葛 和 久 君

正会員 佐 藤 忠 明 君

正会員 阿 部 克 紀 君

阿武隈川畔に位置する曹洞宗長楽寺の伽藍に建設された禅堂である。座禅の場と、地域住民のための集会所の二つの機能をもつ建築として建設された。歴史的な木造伽藍と年古りた樹木の緑、これらと調和しながら現代の技術と構造で新しい禅堂をつくることが求められたという。

仏教寺院は、平安時代に構造を隠して力動感より他の空間印象の実現に進んだが、鎌倉時代に導入された禅宗寺院は構造を露わにし、躍動感ある架構美と空間を復活したという歴史がある。設計者はこうした伝統に学び、構造デザインをこの禅堂計画の中心に据えて、要求に応じている。

コアの RC 管体に乗せられて、宙に浮いたようなシンプルな白亜の箱。1階コアの壁厚は80センチ、2階の白亜の禅堂の側壁は壁厚35センチの壁梁であり、ほとんど構造体のみで構成された建築意匠となっている。2階禅堂は全体が片持ち梁のように見えるが、端部で2本の鉄柱でも支えられている。

禅堂の上に深い陰をつくる屋根と庇がある。1階は3方をガラス壁とした透明感溢れる集会ホールで、透けて見える緑とガラス面に反射する緑が響き合うかのような印象を生み出している。視覚的には1階がないかのような意匠である。大屋根と深い庇、高床構造などの日本建築の伝統を再解釈し継承することが計られている。

禅堂室内は両側に座禅の床があり、中央突き当たりには正方形の窓が一つ開けられただけで、極めてシンプルな構成である。しかし、そこには細心の工夫が組み込まれている。座禅の床の端部には下階から空気を取り入れる換気スリットがあり、壁面から浮いている庇の隙間とで自然換気を、それも静かな空気の動きとしておこなっている。庇下のガラススリットは室内へハイサイドライトの間接光のみを入れている。床から天井まで開けられた正方形のガラス窓は全体を壁面に引き込むことができるが、窓枠に固定された手すりが反対側壁面から出てくる仕掛けがある。禅堂の天井端部に絵画を吊り下げのためのレールが組み込まれており、禅堂は時に展示空間としても利用できる。実際、墨跡展などが催されている。これらの装置が、座禅室のシンプルな構成をほとんどまったく損なわないよう、細心の注意と工夫で作られている。修行的行為とも言えるような、建築構成全体にわたる丁寧さと緻密さの徹底によって、禅堂全体に独特の精神的空気が感じられるように思われる。

階下の集会室はまるで禅寺境内の屋外にいるかのような解放感にあふれ、地域住民に親しまれ、利用も多いという。現代の禅堂の一モデルを示す作品といえよう。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。